

プラトンの「自殺禁止説」

朴 一功

Il-Gong PARK

本稿はプラトンの『パイドン』61C-62C で説かれる「自殺禁止説」の考察を課題とする。この箇所に関しては、＜秘教的な言説＞(62B3) をめぐって、古くから解釈が分かれてきた。しかしいずれの解釈も、多かれ少なかれその言説を『パイドン』のより広い文脈とは独立に考察しており、充分でないばかりか、「自殺禁止説」におけるプラトンの意図を取り違えているように思われる。＜秘教的な言説＞の内容を確定し、対話篇におけるプラトンの「自殺禁止説」の意義を明らかにすることが、私のねらいである。

1

＜秘教的な言説＞の解釈に立ち入る前に、注釈家たちをはるかに悩ませてきた 62A2-7(以下 62A) の文章を考察する。そこにおいてプラトンは自殺に関する問題の正式な提示を行っており、＜秘教的な言説＞はその問題への応答として提出されているからである。62A の文章は、一定の解釈を含まずに訳出することはほとんど不可能である。のみならず、諸解釈はテキストの読みに関して、宥和しがたいほどの相違を示してきた。プラトンの言葉の意味を捉えるために、われわれはまず諸解釈の対立をはなれて、できるだけ直訳に近いかたちでテキストを訳出してみよう¹⁾。

「(1)たぶんそれにしても、君には不思議なことに思えるだろう、(P)あらゆる事柄のうち、ただこのことだけが例外のないことであり、そして(Q)他の事柄のように、人間にとって、あるときある人々にとって生よりも死のほうが善いというようなことは決してないとすれば、また(R)死のほうが善い人

¹⁾ テキストは Burnet に拠る。Heindorf の示唆に従った 62A4 の ὅν の復原は文意に影響しない。テキストの訳に関しては、62A のみならず他の文章についても、藤沢令夫訳(筑摩書房)、松永雄二訳(岩波版)に多くを負っている。またプラトンからのその他の引用は岩波版全集に準拠している。

々にとって²⁾、——(2)たぶん君には不思議なことと思われるだろう——(R)
そのような人々にとって自分で自分に対してその善きことをなすのは敬虔な
ことではなく、だれかほかにそれをしてくれる者を待たなければならないとす
れば。」

ἴσως μέντοι θαυμαστόν σοι φανεῖται εἰ τοῦτο μόνον τῶν ἄλλων
 ἀπάντων ἀπλοῦν ἐστίν, καὶ οὐδέποτε τυγχάνει τῷ ἀνθρώπῳ,
 ὥσπερ καὶ τᾶλλα, ἐστίν ὅτε καὶ οἷς βέλτιον <ὄν> τεθνάναι ἢ
 ζῆν, οἷς δὲ βέλτιον τεθνάναι, θαυμαστόν ἴσως σοι φαίνεται εἰ
 τούτοις τοῖς ἀνθρώποις μὴ ὅσιον αὐτοὺς ἑαυτοὺς εὖ ποιεῖν, ἀλλὰ
 ἄλλον δεῖ περιμένειν εὐεργέτην. (62A2-7)

解釈の困難は(P)(Q)(R)の3つの文章にある。文章そのものとしては(Q)が最も読みにくい。その困難が(P)(R)の処理にも波及する。62Aの後、ソクラテスは「そういうふうに考えると理屈に合わないことのように思える」と言っていることから、(P)(Q)(R)は相互に関連していて、何か一つの問題を示していると考えられる。以下、順次(P)(Q)(R)を検討しよう。

まず(P)における問題は、「このこと」(τοῦτο 62A2)という指示代名詞が何を指しているのかということである。これについては様々な解釈が行なわれてきたが、有力なのは二つである。一つは、62Aの文章をソクラテスが語りだす直前(61E5-9)で、ケベスが、「自分で自分をあやめることは神意にもとる」ことの理由について、「はっきりしたこと」をだれからも、何も聞いたことがないと述べていることから、「このこと」とは「自殺の禁止」を指していると解するもの³⁾、もう一つは、(P)のすぐ後でソクラテスが述べている(Q)の内容を指示すると解するものである⁴⁾。いま、ソクラテスの言葉づかいだけに注意するなら、(P)において「このこと」とは「例外のない」(ἀπλοῦν 62A3)ことだと言われており、この形容詞は(Q)における「決してない」(οὐδέποτε 62A3)という強い否定の言葉と連絡するように思われる。従って、ギリシア語の自然な流れからすれば、「このこと」とは先行する文章の「自殺の禁止」を受けるのではなくて、(Q)の内容を予示していると考えられる。しかし、「このこと」が続く(Q)の内容を指しているとした場合、たとえばGallopは、その内容というのはどこにも明確に言い表されていない事柄であって、これを「このこと」が予示するはずはない、と指摘する⁵⁾。

²⁾(R)は(2)を挟んで続いている。

³⁾この線の解釈は、Geddes(215-6), Archer-Hind(10-11), Tarán(334-6), Loriaux(54-5, 199), Gallop(81), Cooper(16) に見られる。

⁴⁾この線の解釈は、Olympiodorus(10), Simplicius(cap.X)以来、Burnet(61), Hackforth(191), Bostock(17) に見られる。

⁵⁾Gallop, 81.

「このこと」の指示内容に関して、ここでいずれの読みが正しいかを最終的に決めることはできない。その決定は(Q)の読みにかかっているからである。実際、諸解釈は(Q)に関して紛糾してきたのであり、Gallopらが「このこと」を「自殺の禁止」と解するのも、(Q)の意味内容の読み取りの困難さからであった。

2

(Q)における、「あるときある人々にとって生よりも死のほうが善いといううなことは決してない」という文章は二義的である。「あるときある人々にとって」という言い回しに力点をおき、これを「決してない」と結びつけて読めば、文章の意味は、「生よりも死のほうが善い」というのは、「あるときある人々にとって」では「決してない」、ということになる。すなわち、「生よりも死のほうが善い」のは、ある特定の状況においてではなく、無条件的だということになる(これを読み(a)とする)⁶⁾。

もう一つの読み方は、「あるときある人々にとって生よりも死のほうが善い」をひとまとまりのものとして読み、これが「決してない」によって否定されていると考えるのである。この場合、「あるときある人々にとって」という言い回しは、「決してない」という否定詞との通常の結びつきから、「いかなるときにもだれにとっても」という意味をもつことになる。つまり文章全体の意味は、「生よりも死のほうが善い」というのは、「いかなるときにもだれにとっても」「決してない」、ということになる。すなわち、「生よりも死のほうが善い」などというのは、絶対にありえないということである(これを読み(b)とする)⁷⁾。

読み(a)と読み(b)とは、(Q)に関してまったく正反対の意味を引き出している。読み(a)は「生よりも死のほうが善い」という言明を全面的に肯定しており、読み(b)はこれを全面的に否定している。言いかえれば、読み(a)は「死は生よりもつねに善い」という意味を(Q)に見出し、読み(b)は「生は死よりもつねに善い」という意味を見出すのである。しかし、『パイドン』のソクラテスが、「生は死よりもつねに善い」などということを主張するはずがなく、従って読み(b)を採る解釈者たちは、(1)の「君には不思議なことに思えるだろう」という文章が(Q)を否定するはたらきをしていると考える。つまり、「生は死よりもつねに善い」というのは「不思議なこと」あるいは「ありえないこと」、すなわち誤りであると考えるのである⁸⁾。従って、(1)と(Q)とで伝えられる意味内容は、「生は死よりもつねに善いとはかぎらない」、あるいは「死のほうが

⁶⁾ 読み(a)は、Olympiodorus(10), Symplicius(cap.X), Heindorf(25), Stallbaum(29), Bluck(151-3)らに支持されてきた。藤沢訳、松永訳もこの読みに従っている。

⁷⁾ 読み(b)は、Archer-Hind(11), Burnet(61-2), Hackforth(191), Gallop(82), Bostock(17)らに支持されてきた。

⁸⁾ Cf. Geddes, 214; Tarán, 330.

生よりも善い場合がある」ということになる。これに対して、読み (a) の場合は、「死は生よりもつねに善い」ということは、理解困難なこと、文字通り「不思議なこと」であり、(1) は、(Q) の言明が真であるなら、当然対話者に呼び起こされるはずの驚きの感情を示している。

読み (a) と読み (b) のいずれが 62A の文脈にふさわしいかを決定するために、それぞれの読みの主要な論点を検討してみよう。近年多くの支持者を得ている読み (b) を最初にとりあげる。

読み (b) は、「生は死よりもつねに善い」という見解を「多くの人々」のものだと想定する⁹⁾。そして対話者のケベスはこれを疑っており、かくしてソクラテスは (1) と (Q) の文章を述べることになったと考える。確かに、『パイドン』において一般の人々は、死への恐怖、あるいは死による魂消滅への恐怖を抱いているものとして描かれている (70A)。またすでに『弁明』においても、一般の人々は死を「害悪の最大のもの」であるかのように恐れている、とソクラテスは指摘していたのである (29B)。他方またケベスが、場合によっては死のほうが生よりも善い、と考えているのも事実である。彼は自殺禁止理由について「はっきりしたこと」を知らず、ソクラテスに問いただしているからである (61E)。もし彼が死は生よりも無条件に悪いものだとして想定しているなら、自殺禁止理由は彼には明らかであっただろう。自殺は単純に悪の選択にほかならないからである。

だがしかし、一般の人々とは異なったケベスの見解を、なぜ (1) と (Q) とでいわば二重否定というもってまわった仕方で、ソクラテスは確認しなければならないのだろうか¹⁰⁾。しかも、死が場合によっては生よりも善いという見解は、決して特別なものではない¹¹⁾。死への恐怖を抱く一般の人々ですら、このような見解を共有するのはさほど困難ではないであろう。ソクラテスはケベスに対して、より直截にその見解を確認できたはずなのである。

しかしながら、読み (b) の最大の難点は、その読みと、(Q) に続いて述べられる (2) および (R) との関係にある。(R) は、死がより善いにもかかわらず自殺の不敬虔を主張する言明である。まずケベスは自殺の不敬虔について、「はっきりしたこと」は知らない。しかし彼は、死が場合によっては善いという想念を抱いている。自殺禁止理由への彼の疑念は、この想念に基づく。善きものとしての死を、みずから選択することがなぜ禁じられるのか、彼にはわからないのである。(R) はこのようなケベスの考えを捉えて、そこに含まれている論理的困難をはっきりと定式化したものである。従って、(2) の「不思議なこと」とは、(R) の言明におけるこの論理的困難と照応する言葉であり、それは (R) の言明を真とするものでもなければ、偽とするものでもない。むしろ、(R) の言

⁹⁾ たとえば, Burnet, 61.

¹⁰⁾ Cf. Bluck, 151; Tarán, 330–1.

¹¹⁾ たとえば, *Laches* 195C–D を見よ。

明が真であるなら、その論理的困難が「不思議なこと」として対話者の目に映るのである。

しかるに、読み (b) は (Q) の言明に関しては、その偽をケベスの想定とし、(1) の「不思議なこと」はその想定と結びつくものとしている。すなわち、読み (b) は (1) の「不思議なこと」を (2) のそれとは異なった仕方で読んでいるのである。だが、ソクラテスが問題をまとめて提示する 62A の文章において、連続して現われる「不思議なこと」という言葉の意味に、読み (b) の見るような仕方で変換が生じているとはきわめて考えにくい。実際、(1)(2) の両方の文章で、ソクラテスはほとんど同じ言葉づかいをくり返しているのである。(1) の「不思議なこと」も、(2) のそれと同様に、言明に関する理解の困難さを表わす言葉であるだろう。

3

他方、読み (a) の方は (1)(2) の「不思議なこと」の意味に関しては一貫している。しかしこの読みにも難点がいくつかある。一つは、(Q) において、「あるときある人々にとって」という言い回しに強い力点をおくのが自然な読み方であるかどうかということである。その言い回しが「決してない」と結びついて、「死は生よりもつねに善い」の意味を表すとすれば、(Q) の文章は「堪えがたいほどにぎこちない」表現だと Gallop は指摘する¹²⁾。読み (a) を採る Bluck もその言い回しを、only on some occasions and in some cases と訳し、テキストにない “only” をつけ加えている¹³⁾。(Q) の文章を見るかぎり、確かにそれは「ぎこちない」という印象を受けるかもしれない。だが、われわれは (P) から (Q) へと文章を読んでゆくのであり、(P) における「例外のない」(あるいは「無条件的」ἀπλoύv) という言葉は、(Q) において “only” という意味の読み取りを促すように思われる。つまり、意味の流れは、このことだけが「例外のない」ことであり、…「あるときある人々にとって(だけ)」…「生よりも死の方が善い」というのでは「決してない」、というふうに進進しており、これは決して「ぎこちない」表現の仕方ではない。

しかし注釈家たちの指摘する読み (a) のより大きな難点は、「死は生よりもつねに善い」という言明そのものにある。Gallop はこの言明に関して、第一に、『パイドン』においても他のどこにおいても、このような考えは見られないし¹⁴⁾、また第二に、これが自殺禁止を疑わせる根拠と想定することもできないと主張

¹²⁾ Gallop, 80.

¹³⁾ Bluck, 43. また Cf. Geddes, 214; Tarán, 329; Gallop, 80.

¹⁴⁾ この点に関してはまた、Cf. Geddes, 215; Tarán, 329–30.

する¹⁵⁾。第一は典拠の問題であり、第二は論理の問題である。

第一の難点に関しては、「だれにせよおよそこの仕事(哲学)に本当にたずさわっているといえるだけの者なら、ぼくの言ったようにしようとする(死にゆくことを望む)はずだ」(61C8-9)というソクラテスの言葉をどのように受けとめるかによって、解釈が分かれるだろう。死が生よりも望ましいのはただ哲学者にとってだけであって、人間一般にとってではないと Gallop らは言う¹⁶⁾。しかし、ソクラテスが哲学者の死への願望を語るとき、彼は哲学者にとってだけ死は生よりも望ましいということを決して意味してはいない¹⁷⁾。哲学者は死の善さを洞察しており、それゆえに死を願望するというのが、『パイドン』のソクラテスの思考である¹⁸⁾。とすれば、哲学者の洞察する死の善さは、もっぱら哲学者にだけあてはまるようなものではないであろう。62A の (P)(Q) によってソクラテスはこのことを述べていると考えられる。

しかし、哲学者の死への願望によって、対話者たちは、生に対する死の善さの無条件性という含意を了解してはいず、従って、(Q) でそのような内容を導入するのは唐突であると反論されるかもしれない。この反論は適切である。ケベスもシミアスも、自殺禁止理由ばかりか、哲学者の死への願望についても、「はっきりしたことは何も」知らないからである(61D3-8)¹⁹⁾。けれども逆に、

¹⁵⁾ Gallop, 80.

¹⁶⁾ Gallop, 80; Geddes, 215; Tarán, 329.

¹⁷⁾ Cf. Bluck, 152.

¹⁸⁾ Tarán は、Bluck を批判して、ソクラテスは61Cではただ哲学者は哲学者として生よりも死を望むということだけしか述べていないと主張し、特に哲学を「死の練習」と捉える63E8-64C3の記述を典拠にしている。しかしソクラテスはかの世で善き神々に出会う希望を述べており(63B-C, 69E)、またそれに対してケベスは、「ほかの点では私は全く同感です。ただ、あなたが魂について考えていらっしゃるようなことは、普通の人々には(τοῖς ἀνθρώποις)なかなか信じることのできないものです」と反論し、ソクラテスに魂不死の証明を要請している(69E-70A)。死後の「多くのたのしい期待」(70A8)は哲学者だけにかぎられるものではないであろう。問題は魂の不死性にある。他方、Geddes は、プラトンは死後の報酬のみならず罰をも考えており、従って死は善き人々には至福となるが、悪しき人々には悲惨となると主張する(215)。しかし死後の罰を生(の)の邪悪さよりも悪だとする見解を示唆するテキストは、多くの注釈家たちが削除する「そして善き魂にはより善きことが、悪しき魂にはより悪きことがある」という72E1-2の文章を除いて『パイドン』には存在しない。

¹⁹⁾ Tarán は、62C9にいたるまで、哲学者の死への願望に関してはだれも異議を唱えてはいず、対話者たちに了解済みのことと解する(332)。だが、ソクラテスがシミアスに死の勧めをエウエノスに伝えるようにと語るや、シミアスは即座に驚いている。ソクラテスはエウエノスが哲学者であることをシミアスに思い起こさせるが、シミアスはそのことが何を意味するのか了解してはいない。こうしてソクラテスは哲学者の死への願望について語り、自殺の禁止をつけ加える(61BC)。これを受けてケベスは、「それはどういう意味なのでしょうか、ソクラテス、自分をあやめるのは神意にもとることなのに、しかも哲学者

そのゆえにこそ (Q) を語るに際して、ソクラテスは「不思議なこと」という言葉を使うのである。これは (Q) の導入の唐突さを予期し、それを緩和するはたらきをしていると見られる。

第二の難点に関しては、(Q) に続く (R) をどのように読むかで解釈が分かれるだろう。自殺禁止を疑わせるには、「死は生よりもつねに善い」という立言を必ずしも必要としない。少なくとも、死が生よりも善い場合があれば充分である。この点において、Gallop の主張は正当である。(R) でも、「死のほうが善い人々にとって」と述べられており、これは彼の主張を支持するように思われる。従って、読み (a) は (R) でつまずくように見える。(R) の「死のほうが善い人々にとって」という言葉が、(Q) の内容を直接受けているのは確実である。それは、(Q) の直後で、しかも (R) の他の言葉とは別個に語られているからである。読み (a) を採用する Bluck は、その言葉は (Q) の内容の自然な反復あるいは要約だとして、(Q) から (R) への連続性を強調する²⁰⁾。しかし、連続性に関するかぎり、読み (b) の方がいっそう自然に思われる。「死のほうが善い人々にとって」とは、(Q) とのつながりにおいて読むならば、ある特定の人々を指していると思われるからである。読み (a) を採る場合、なぜこのような言い回しが行なわれるのかを説明しなければならない。解釈の鍵は (R) の内容にある。

(R) では、その言い回しはさらに、「そのような人々にとって」という言葉で受けられており、これは、(R) が独立した一つのまとまった文章であることを示していると考えられる。言い換えれば、(Q) と (R) との間には一定の切れ目があるのである。それならば、(R) の言明は、死のほうが善いある人々に関しただけ言われたものであるのだろうか。ここで注意すべきは、(R) は自殺禁止を疑わせる理由を提示する言明であって、そうである以上、その言明において死の善さが特定のある人々にとってか、あるいは人間一般にとってかは第一義的な問題ではないということである。死の善さにもかかわらず死の選択が禁じられる、という論理的困難を明示することが (R) のねらいである。従って、「死のほうが善い人々にとって…」とは、意識すれば「死のほうが善いのに、人々が…」ということであり、逆接の意味を含んでいよう。

さて、以上の考察に基づき 62A に関する私の見解を要約してみる。

- (1) (Q) に関しては、私は読み (a) を採用し、その言明は、生に対する死の無条件的な善さを表明していると考ええる。
- (2) 従って、(P) における「このこと」とは、「自殺の禁止」ではなく、(Q) の

は死にゆく者の後を追おうとするはずだというのは」と問いただす (61D4-5)。この問いは、自殺の禁止を疑問にしているという Tarán の指摘とは逆に、哲学者の死への願望の方にむしろ疑いの力点を置いているだろう。哲学者の死への願望は対話者たちに了解済みのことではない。

²⁰⁾ Bluck, 152.

内容を指していると考ええる。その内容はソクラテスの言及する、哲学者の死への願望 (61C) に含意されているからである。

- (3) 62A で二度現われる「不思議なこと」とは、(Q) における死の善さの無条件性、および (R) における自殺禁止の論理、という二つの理解困難な事柄を形容する言葉と解する。しかし、死の善さという事柄は、(R) を述べるための前提となっており、この意味において、(Q) は (R) に従属する。従って、62A における中心問題は (R) に帰着する。

4

62A のプラトンの問題提示が以上のようにであれば、続く 62BC における「自殺禁止説」の論拠はどのように解されるべきであろうか。(Q) により、逆に人間の生が何らかの仕方で死よりもつねに悪しきものであるとすれば、「自殺禁止説」は、人間の生にそのような悪を凌駕する何らかの意味があることを示すものでなければならない。それは、ある特定の状況における人間の生の善し悪しを考察するものではない。プラトンはソクラテスに次のように語らせる。

「この問題に関する＜秘教的な言説＞によると、われわれ人間はある見張りのなかにいるのであって、決してかってに自分をこの見張りから解放したり、逃亡したりしてはならないのだと言われているが、これはなみなみならぬ重大な教説であって、その真意は容易に見透せないもののようにはぼくには思える。ただ、ケベス、これだけは適切に語られていると思われるのは、われわれは神々に見まもられているのであって、われわれ人間は神々にとっての家畜²¹⁾のひとつだということだ」(62B2-8)

ソクラテスは即答を避け、代わりに＜秘教的な言説＞を提示する。それは、理解困難な「重大な」教説であって、彼はそれの立ち入った説明に踏み込まない。しかし、われわれ人間は神々から見まもられ、神々の「家畜」だとする見解を、「適切に語られている」(εὖ λέγεσθαι) と指摘する。ソクラテスの了解するこの見解との重ね合わせによって、われわれは＜秘教的な言説＞の内容を探りだすことができるはずである²²⁾。問題はこの言説で、「われわれ人間はある見張りのなかに (ἐν τινι φρουρᾷ) いる」と述べられている点である。この文章は二様に解しうる。一つは、「われわれ人間は見張られている」という受動の意味で

²¹⁾ χτήμα は、広義には所有物を、狭義には家畜を意味する。ここでは「所有物」の意味の方がふさわしいかもしれない (Cf. 松永, 171, n.3)。しかし人間 (牧者)-家畜関係 (62C1-3) が、神-人間関係を照らすものである以上、訳語としてはあえて「家畜」を採用する。

²²⁾ ＜秘教的な言説＞と人間 = 「家畜」説とを別個なもの、あるいはなかば別個なものとする Geddes(19), Bostock(18), Gallop(83-5) の見解を採らない。「適切に語られている」という言葉が示すように、人間 = 「家畜」説は＜秘教的な言説＞に組み込まれているからである。

あり、もう一つは、「われわれ人間は見張っている」という能動の意味である。実際、古くから解釈はこの二つに分かれてきたのである²³⁾。

第一の解釈を採る者たちは、「見張り」の意味を「牢獄」と解する。すでにアカデメイア的対話篇『アクシオコス』に、「なぜなら、われわれ人間は魂、すなわち死すべき見張り小屋に閉じ込められた不死なる生きものなのだから」(365E6)という文章が見える。Burnetはこの典拠は「見張り」を「牢獄」と解する見解を強く支持すると言う²⁴⁾。また、よく知られているように、肉体を「魂の墓」とする考えが、『ゴルギアス』493A、『クラテュロス』400Cに見られる。のみならず、『パイドン』内部において、われわれは肉体を「魂の牢獄」とする考えに出会うのである(82E)。こうした証拠から、「見張り」とは「牢獄」としての肉体を指すものと推定できる²⁵⁾。さらに、ソクラテスは「解放する」(λύειν 62B5)という言葉を使っており、これは人間が「見張り」のなかに捕えられていることを強く示唆する、とCooperは指摘する²⁶⁾。こうして問題の文章から、「われわれ人間は牢獄のなかに捕えられている」、そしてさらに「人間の魂は肉体のなかに閉じ込められている」という意味が引きだされる。この読みは、肉体を悪の源と見なし、魂の肉体からの離脱(死)を善きものとする『パイドン』のプラトンの見解にも(66B-68B)、また62Aの(Q)の意味にも合致しているように思われる。

そこで第一の解釈は自殺禁止理由について次のように想定する。つまり、人間の魂はおかした罪のゆえに、罰としてこの世で肉体のなかに閉じ込められているのであり、人間の生とはみずからの罪のあがないにほかならない。それゆえ自殺とはそのあがないの義務の放棄であり、不敬虔なことだと解するのである。すなわち第一の解釈は<秘教的な言説>のうちに、いわゆるピュタゴラス派の主要教説を読みとるのである²⁷⁾。

しかしながら、この解釈には大きな難点が含まれている。なぜならそれは、われわれ人間は神々の「家畜」だとする見解と整合しないからである。Cooperは、「われわれは神々から見まもられている」という見解は、「われわれは牢獄に

²³⁾これはむしろ *φρουρά* という語の二義性によるかもしれない。プラトンはその言葉を *Grg.*525A7では「牢獄」の意味で、*Leg.*VI 762C5では「見張りの仕事」の意味で使っている。

²⁴⁾Burnet, 62. また Cf. Guthrie, 395, n.1.

²⁵⁾たとえば, Hackforth, 36; Vlastos, 56, n.44.

²⁶⁾Cooper, 15. 「逃亡する」(*ἀποδιδράσκειν*) もまた囚人の行動を示す語であると Loriaux(64) は注意している。

²⁷⁾Cooper, 15, 34, n.7; また Cf. *Cratyl.*400C. ただし『クラテュロス』ではプラトンは肉体=墓=牢獄という見解を述べるにあたって、「ある人々」のみならず「オルペウスの徒」にも言及している。従ってこの見解はオルペウス教的とも呼べるかもしれないが、この点に関してはDoddsのすぐれた論考(147ff, 特に169-70, n.87)が判断保留を促している。

閉じ込められている」という考えから自然に導かれると主張する²⁸⁾。だが、「見まもられている」(ἐπιμελουμένων 62B7)という言葉は、「監視されている」よりもむしろ、「配慮されている」という意味を表すであろう。実際、牧者が罰するために家畜を所有するというのは、はなはだ奇妙な想定だと言わなければならない²⁹⁾。

プラトンがピュタゴラス派の哲学者ピロラオスに言及していることから(61D7)、また「秘教的な」(ἀπορρήτοις 62B3)という陰影のある特殊な言葉から³⁰⁾、われわれは<秘教的な言説>のうちにピュタゴラス派の主要教説を読みとるよう誘われるかもしれない。しかしプラトンはケベスに、自殺禁止理由についてピロラオスからもほかのだれからも「はっきりしたこと」を何も聞いてはいないと語らせており(61E)、これはプラトンがピュタゴラス派の教説をそのまま受け入れているのではないことを示している。のみならず、「われわれ」と「見張り」との関係を、「魂」と「肉体」との関係に置換することを示唆する言葉は、62BCの文章には見出されない。逆に、「われわれ人間は」という指示性の強い言い回しがくり返されており(62B4, 9)、これは「われわれ」を単純に「魂」に読み換えてしまうことを禁じているように思われる。

5

第二の解釈はキケロに見える。『老年について』20章(73節)の箇所では、「ピュタゴラスは、最高指揮官の、すなわち神の命令なしに、人生という見張りの部署から(*de praesidio et statione vitae*) 退くことを禁じている」と述べている。この解釈は、人間の生を「見張り」の場所と見なし、そこにおいて人間は「見張り」の仕事を遂行すると解するのである。言い換えれば、「見張り」とは、肉体をまとった人間がその生活を営むこの世界そのものを指しており、しかもその生活が神の命令に従属し、一定の義務を帯びていることを示している。またその義務は、砦を守るという戦場における戦いに比せられるが、その戦いというのは人間が生を終えるときまでやむことがない。戦いとしての人間の生は、かくして苦痛にみちており、逆に死は安らぎであり、善きものであるだろう。この解釈もまた62Aの(Q)に合致している。そしてこのとき、自殺とは「見張り」の部署から「逃亡する」ことであり、神によって命ぜられた仕事を放

²⁸⁾ Cooper, 15.

²⁹⁾ Cooper(16)は、神々の人間に対する罰を善きものと認定する。Loriaux(62-3)はさらに魂の肉体への閉じ込めが、浄化と教育の目標をもっていると強調する。しかしこのような逆説は牧者-家畜関係から直接帰結する事柄ではない。

³⁰⁾ この言葉はよく知られているように、*Tht.*152C10ではプロタゴラス説との関連でもちいられている。それは隠されたプロタゴラス説というようなものを指示するのではなくて、むしろプロタゴラス説が重大な問題を孕んでいることを示す言葉であるだろう。

棄することにほかならないと解される。

われわれはここで『弁明』のソクラテスの言葉を思い起こしてよいかもしれない。

「もしもわたしが彼ら(指揮官たち)の命によって配置された場所に、他のひとと同様、ふみとどまって、死の危険を冒しておきながら、いま神の命によって——とわたしは信じ、また解したわけなのですが——わたし自身でも、他の人でもよくしらべて、知を愛し求める生きかたをして行かなければならないことになっているのに、その場において、死を恐れるとか、何か他のものを恐れるとかして、命ぜられた持ち場を放棄するとしたなら、それこそとんでもない所業になるでしょう」(28D-29A)。

しかしながら、自殺を戦いからの逃避と見る第二の解釈もまた、われわれ人間は神々の「家畜」だとする見解と整合しない。「家畜」(人間)は、牧者(神)のためになすべき仕事をもっており、それは罰せられるためではない。この点に関して第二の解釈に問題はない。またその仕事をするために、神々から配慮され、「見まもられている」と考えるのも不自然ではない。だが、「家畜」の仕事とは何か。それは「見張り」の仕事をするのだろうか。またもしするとすれば、いったい何を見張るのだろうか。ここで「見張り」は人間の仕事一般を意味するメタファーだと言われるかもしれない。しかしそれは純然たるメタファーではない。「見張りのなかにいる」は「見まもられている」と連絡する言葉だからである。「見張り」をするのは明らかに、「家畜」ではなくて牧者である。つまり神が見張るのであって、人間が見張るのではないのである。また、見張りから「自分を解放する」という言葉は、Cooperの指摘するように、見張っている状態からではなくて、見張られている状態から「自分を解放する」という意味であるだろう³¹⁾。

第一、第二の解釈のいずれにも難点が含まれている。両者はともに、人間を神の「家畜」とする見解とうまく符号しないからである。しかし以上の考察より、＜秘教的な言説＞についてわれわれは次の事柄を確認することができるだろう。

第一に、「見張りのなかにいる」とは「見張られている」という受動の意味をもっている。第二に、これは、人間の魂が「牢獄」としての肉体のなかに閉じ込められているということではなくて、単純に、われわれ人間が神々によって見張られていることを意味していよう。のみならず第三に、見張られているのは、人間ばかりでないことにわれわれは注意しなければならない。人間は神々の「家畜のひとつ」(ἐν τῶν κτημάτων 62B8)にすぎず、神々はこの世のすべてのものを見張っていると考えられる。すなわち「見張り」とは神々の見まもるこの世界全体を指しているのである。従って、第四に、人間の生の権利は、この世界全体の支配者である神々に帰属しており、自殺とは神々の有する世界

³¹⁾ Cooper, 15.

の支配権を侵犯することにほかならない (Cf. 62C) ³²⁾。

6

以上の解釈が受け入れられるならば、われわれには二つの問題が生じる。一つは、62A の (Q) との関係である。人間が神々に配慮されているならば、その生は善きものであるはずである。だがこれは死のほうを無条件に善いとする (Q) の言明と衝突する。この問題は実際ケベスによってはっきりと指摘され (62C-E)、ソクラテスはそれに応答する。だがしかし、彼の応答はたいへん不十分なものである。かの世に行けば、この世を支配する神々とは別の、「非常に善き」神々のもとにいたるのだとソクラテスは答えるだけである (63B-C)。「非常に善き」神々への言及は、死の善きの無条件性を言い換えたにすぎない。ソクラテスは自分の応答の正しさを強く主張するけれども (63C3-4)、それは彼の信念の吐露が出るものではない。ケベスの問いに答えるためには、かの世の神々がどのような善き配慮を行なうのかをさらに説明しなければならない。死の善きは、不明のまま残されていると言わなければならない。

もう一つの問題は、いま述べられたことと関連する。この世の神々が人間に配慮するがゆえに人間の生は意味をもつと主張するのは、十分な自殺禁止理由ではない。神々がどのような配慮をし、人間の生にどのような意味があるのかを、われわれはなおも問うことができるからである³³⁾。この問いは、われわれの生き死にの決定が、われわれ自身の手にはないと見なされるとき、いっそう重要なものとなる。自殺の是非が第一義的な問題ではなくなるからである。『パイドン』のソクラテスはこの点に盲目ではない。彼は<秘教的な言説>の説明において次のようにつけ加えているからである。

「…たとえば現に今ぼくに与えられているような、何らかの必然を神が下したもうまでは、みずからのいのちを絶ってはならないというのは、けっして理由のないことではないのだ」(62C6-8)

すなわち、プラトンは自殺の禁止を絶対的なものとは見ていない。「何らかの必然」(ἀνάγκην τινά) を神が下したもうなら、自殺もまた許容されるのである³⁴⁾。問題は、神が人間の生き死にを、何によって決定するかである。神の下

³²⁾ この方向の解釈を Cooper(16) は示唆したが、彼がこの世の人間の生を罰と解し、さらにそれを善きものと見なすのは行き過ぎである。

³³⁾ Cf. Bostock, 19.

³⁴⁾ ソクラテスの刑死は自殺でないと言われるかもしれない。しかし 62C6-8 の文章は、それが自殺であることを含意している。Hackforth(36, n.4) は、たとえ強制によるものであっても、自分をあやめることは自殺と見られるというのがおそらく当時の通常の見解であったと注意している。このことに関してはまた Cf. *Leg.* IX 873C. しかしソクラテスにとって重要なのはいつ死の選択あるいは受容を行なうかであって、自殺という方途はそれに従属している。この点において、ソクラテスの場合、自死の行為は単に許容されるば

す「何らかの必然」とは何か、この読み取りが、人間の生あるいは死を正当化するのである。人間の生の意味もまたここでは依然不明であると言わなければならない。

かくして、＜秘教的な言説＞によるプラトンの「自殺禁止説」は、単に自殺の禁止を説くものではない。それは、世界のあり方との関連で、人間の生と死の意味を問うものであり、その問題をプラトンはまぎれもなくソクラテスの生き方から受けとったのである。神の命によって愛知の営みを貫徹し、かつまた自己をあやめたソクラテスの生と死とは、いったいどのような意味をもつのか、この問いが＜秘教的な言説＞の背後にあるものである。その言説は人間の生死に対する根本的な洞察を示すものでなければならないであろう。しかしそれは「自殺禁止説」では示されない。それどころか、その課題はプラトンが最晩年まで取りくみ続けた仕事なのである。だがここでわれわれは、彼の変わらぬ信念と問題解決の方向性だけは確認できるはずである。『法律』第10巻で、アテナイからの客人は次のように言う。

「万物は、その全体が保全されてよき状態にあるようにと、宇宙全体を配慮している者によって秩序づけられている…強情な若者よ、君という存在もまた…きわめて微々たるものではあるにせよ、つねに宇宙全体へ目を向けながら、それに寄与しようとしているものなのだ。ところが君には、…すべての生成は、宇宙全体の生に幸福がもたらされるようにという、そういう目的のために行なわれているのだということが、分かっていないのである。君のために生成が行なわれているのではなく、宇宙全体のために君はつくられているのだ、ということがね」(903B-C)

人間の生死は宇宙全体の生のなかに組みこまれている。人間は宇宙全体のために存在しているのであって、その逆ではない。だがしかし、これはプラトンの見解の一面にすぎない。不満を抱く若者に、アテナイからの客人は続けて言う。

「君の場合にも、宇宙全体にとって最善となるようあり方をすることが、君と宇宙とは生まれを共通にするものであるがゆえに、君自身のためにも最善となるのだ」(903D)

人間の生と宇宙の生とは同族であり、宇宙の善は人間の善と連絡する。しかし宇宙の善とは何か。この問いこそ＜秘教的な言説＞が真に問いかけるものであり、これが解き明かされなければ、人間の善もまた不明となる。おそらくその解決が最も重要であるばかりか、最も困難であるがゆえに、プラトンはその言説について「これはなみなみならぬ重大な教説であって、その真意は容易に見透せない」とソクラテスに語らせたのである³⁵⁾。＜秘教的な言説＞はこうして、『パイドン』におけるプラトンの善原因論の構想とその挫折(97B-99D)を予示する。

かりでなく「宗教的義務」—この用語は必ずしも適切ではないが—だと見る Gallop(85)は正しいであろう。

³⁵⁾ この言葉を Geddes(18), Cooper(15) らは、人間の生を罰と見る教説の理解困難さを示すと解している。

(甲南女子大学助教授)

参照文献

- [1] Archer-Hind, R. D., *The Phaedo of Plato*, London, 1894.
- [2] Bluck, R. S., *Plato's Phaedo*, London, 1955.
- [3] Bostock, D., *Plato's Phaedo*, Oxford, 1986.
- [4] Burnet, J., *Plato's Phaedo*, Oxford, 1911.
- [5] Cooper, J. M., 'Greek Philosophers on Euthanasia and Suicide', in Brody(ed.) *Suicide and Euthanasia*, 9-38, Dordrecht, 1989.
- [6] Dodds, E. R., *The Greeks and the Irrational*, Berkley, 1951.
- [7] Gallop, D., *Plato's Phaedo*, Oxford, 1975.
- [8] Geddes, W. D., *Platonis Phaedo*, London, 1885.
- [9] Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy V*, Cambridge, 1978.
- [10] Hackforth, R., *Plato's Phaedo*, Cambridge, 1955.
- [11] Heindorf, L. F., *Platonis Dialogi Selecti IV*, Berlin, 1809.
- [12] Loriaux, R., *Le Phédon de Platon I*, Namur, 1969.
- [13] Olympiodorus, *In Platonis Phaedonem Commentaria*, ed.W.Norvin, Leipzig, 1913.
- [14] Simplicius, *Commentarius in Enchiridion Epicteti*, London, 1670.
- [15] Stallbaum, G., *Platonis Opera Omnia I.2*, Gotha, 1850.
- [16] Tarán, L., 'Plato, *Phaedo*, 62A', *American Journal of Philology* 84, 326-36, 1966.
- [17] Vlastos, G., *Socrates*, Cambridge, 1991.